

# 動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福感および学習・生活への適応に及ぼす影響

目白大学大学院心理学研究科 譚 紅艷  
目白大学人間学部 渡邊 勉  
目白大学人間学部 今野裕之

## 【要 約】

本研究の目的は、在日中国人留学生の異文化適応（主観的幸福感、学習・生活への適応）に対する動機づけの影響について、自己決定理論に基づいて検討することであった。以上の変数を含んだ質問紙が日本の大学に在籍する中国人留学生307名に実施された。その結果、中国人留学生において、自己決定性の高い動機づけは主観的幸福感および学習・生活への適応状態と正の関連を示した。他方、自己決定性の低い動機づけは主観的幸福感および学習・生活への適応状態と負の関連を示した。このような自己決定性の低い動機づけを持つ留学生に対してどのような援助が必要になるのかは今後の課題である。

キーワード：自己決定理論、動機づけ、主観的幸福感、適応、中国人留学生

## 問題と目的

異文化適応とは、ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である（高井，1989）。これまでの在日留学生を対象とする研究では、留学生の様々な問題と困難が注目されてきた。例えば、日本語能力の問題（葛，1999；2003）、心身の健康やストレス（姚・松原，1990）、対人関係上の問題（松原，1991；湯，2004）などである。このように、在日留学生は、言葉、経済、対人関係など様々な領域で困難な問題を抱えているが、最近では、それらの問題を引き起こしたり解決したりする要因、つまり留学生の適応に影響する要因に研究の焦点は移行しつつある。留学生の適応に影響する要因として、これまでに指摘されてきたものには、学習環境、生活環境などのデモグラフィック要因や環境条件など個人属性のほかに、日本語能力（上原，1988；徐・蔭山，1994）、日本社会特有の対人的スキルの獲得度（田中・藤原，1992）、対人

関係の広がりやソーシャル・サポートの量（周，1995）などがある。さらに、対人コミュニケーション行動、日本人との交流、ホスト国の言語能力の欠如やホスト国に関する社会知識不足（田中，2003；湯，2004）などが対人関係の形成困難の原因となり、留学生の適応を阻害する要因となることが示唆されている。ただし、これらの研究は、いずれも留学生の言語面、行動面の問題に焦点を当てた研究といえるものの、留学生の心理的側面について、適応との関連を検討した研究は少ない。後述するように、多くの研究が動機づけと適応との間に関連があることを示している。そこで本研究では、心理的側面として留学動機づけと学習動機づけを取り上げ、自己決定理論（Self-determination theory: Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000）に基づいて、留学生の動機づけと適応の関連を検討する。

### 動機づけと適応の関連の研究

自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000) とは、内発的動機づけと外発的動機づけを自己決定の程度という連続体上で統合して捉える理論である。この理論では、自己決定性 (自律性) の程度によって動機づけを区別し、より非自己決定的な順に、外的動機づけ、取り入れ的動機づけ、同一化的動機づけ、統合的動機づけ、内発的動機づけと分類されている。(1) 外的動機づけとは、外的な要求や罰、他者にさせられているといった理由によって行動が行われているものであり、最も非自己決定的動機づけである。(2) 取り入れ的動機づけは、明らかな外的働きかけはないが、部分的に内在化されている動機づけであり、一応は自分で決めているところが外的動機づけとは異なる。(3) 同一化的動機づけは、取り入れ的動機づけより一層自己決定が積極的な方向に進んでいて、自分に重要であるからなどの理由で自発的に行動が行われているものである。(4) 統合的動機づけは外発的動機づけであるが、その中でも自己決定のレベルが最も高い段階である。この動機づけは、行動を起す際に自分の日常生活や価値づけられた目標との適合度が高いこと、また行動が統合されていることを意味する。(5) 内発的動機づけは、外的な要求や罰に基づかない自己決定的な動機づけである。これは、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられ、行動自体を目的とするものである。

近年、自己決定理論は精神的健康や適応などを予測できる理論として注目を集めている。これまでの研究 (e.g., Kasser & Ryan, 1999) によれば、自己決定的に動機づけられている行動は、その後の適応的な心理状態をもたらす一方、自己決定的でない動機づけに基づく行動は不適応的な心理状態をもたらすことが示されている (永作・新井, 2003)。例えば、永作・新井 (2005) は、高校生を対象にした縦断的調査を行い、学校生活や人間関係における適応が高校進学動機といかなる関連を持つかについて実証的に検討を行っている。その結果、自律的な進学動機を持たずに進学した生徒の適応状態が悪くなっており、自己決定理論が実際の学校適応

を説明可能であることを示している。また、安藤 (2005) は大学生を対象にして、大学コミットメントと学生の持つ自律性欲求および学習への動機づけとの関連について調査し、自律性欲求が高く、より自律的な動機づけを持つ学生はより適応的なコミットメントを持っていることを示した。以上のように、先行研究において、高校生や大学生の心理社会的適応は動機づけと明瞭な関連を持っており、それは自己決定理論による予測に概ね一致したものと見える。

### 本研究の目的

上記のように、最近では動機づけと適応の研究が盛んになっているが、留学生を対象にして、動機づけの観点から異文化適応に及ぼす影響について検討したものは極めて少ない。その中で、吉 (1999) は、在日日本語学校学生の調査を通じて、学習態度・意欲が肯定的であるほど心身の健康度が高いことを明らかにしている。ただし、この調査では、対象は留学生ではなく日本語学校生である点や、自己決定理論に基づいて動機づけを測定していない点を考えると、この研究の結果は留学生における動機づけと適応の関係を考えるうえでは十分な結果とはいえない。そこで本研究では、在日留学生のうち最も比率の高い中国人留学生を対象とし、自己決定理論の立場から、動機づけが中国人留学生の適応に影響を及ぼすかどうかについて実証的に検討することを目的とする。留学生の動機づけと適応の関係を明らかにすることで、留学生の自己決定を支援できるような方法やよりよい働きかけなどの教育的な援助ができると期待される。

ただし、先行研究により、日本語能力、日本社会特有の対人的スキルの獲得度、対人関係の広がりやソーシャル・サポートの量、滞在期間などの要因が異文化適応に及ぼす影響は大きいことが示されている。従って、これらの要因をある程度統制して動機づけと適応の関連を検討する必要があると考えられる。本研究では、日本語能力要因 (岩男・荻原, 1988; 佐藤, 1996; 湯, 2004)、滞在期間要因 (岩男・荻原, 1988; 佐藤, 1996) を考慮し、これらの要因を統制した動機づけと適応の関連の検討を行う。

本研究では、先行研究の知見に基づき、中国

人留学生の異文化適応において動機づけが影響していると予測する。具体的には、自己決定理論から、次のような関連があると考えられる。すなわち、自己決定性の高い動機づけは適応指標と正の関連、自己決定性の低い動機づけは適応指標と負の関連を示すであろう。なお、適応の指標としては、主観的幸福感と学習・生活への適応を用いる。

## 方法

### 調査時期

2007年5月に実施した。

### 調査対象者

都内の大学4校に在籍する大学生および大学院留学生356名を対象に実施した。そのうち、中国人留学生307<sup>1)</sup>名(男性148名、女性154名、不明5名)のデータを有効データ(使用言語は日本語・中国語)として分析の対象とした。平均年齢は、20～24歳(50.5%)、25～29歳(38.8%)の順で多かった。

### 調査の手続きおよび倫理的配慮

授業時間中に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。なお、調査への参加は自由意思によること、無記名回答とすることにより個人の匿名性は守れることを紙面で教示した。

### 調査内容

**主観的幸福感** 留学生の全般的な心理的適応状態の測度として、伊藤・相良・池田・川浦(2003)による主観的幸福感尺度を用いた。ただし、その中から「まわりの環境と一体化していて欠かせない一部であるという所属感」「非常に強い幸福感を感じる瞬間」「人類という大きな家族の一員」の3項目を削除した。これらの項目は宗教的な経験が日常生活の基盤にない多くの中国人留学生にとって馴染みにくいということから、本研究では上記の3項目を尺度からはずし、残り12項目を用いた。この尺度は、青年(大学生)から成人までの幅広い範囲に適用でき、信頼性、妥当性も十分であるため、中国人留学生にも適用すると考え、本研究に用いた。回答は4件法により評定を求めた。

**学習・生活への適応** 留学生の学業および生活

面の適応状態を測定するため、佐藤(1996)による留学生向けの適応尺度を用いた。この尺度は「学習の精神状態」「学習の指導」「経済的側面」「学生生活」「身体面の健康」「生活環境」「大学の支援体制」の7つの下位尺度からなる。このうち「生活環境」は、「礼拝などを行う環境が整っていないで困っている」「トイレ・風呂等の様式に困っている」などの項目は日本で中国人留学生の生活に適切な項目ではないため、本研究には用いなかった。また「大学の支援体制」は、大学に対する不満をあらわす尺度であり、適応状態とはやや異なると考え、本研究には用いなかった。使用する項目は全部で26項目であり、回答は「1当てはまらない」から「4当てはまる」の4件法により評定を求めた。

**自律的留学動機づけ** なぜ留学をしようと思ったかという留学の動機づけを測定するため、中国人留学生の状況(生活、勉強)を考慮したうえで、永作・新井(2003)が作成した自律的進学動機づけ尺度を参考に留学生用に改変して用いた。この尺度は、「統合的・内的動機づけ」「同一化的動機づけ」「外的・取り入れの動機づけ」の3因子から構成されている。新たに作成した尺度は28項目からなる(Table 1)。回答は「1全く当てはまらない」から「5よく当てはまる」の5件法により評定を求めた。

**留学生学習動機づけ** 安藤(2005)が作成した日本の大学生向けの学習動機づけ尺度を参考に留学生用に改変して用いた。この尺度は、「内発的動機づけ」「同一化的動機づけ」「取り入れ的動機づけ」「外的動機づけ」の4因子から構成されている。実施に際しては、中国人留学生の勉強状況を考慮したうえで、学習動機づけ尺度のうちの5つの項目を削除して、新たに「日本の生活に慣れるために必要があるから」といった5つの項目を追加し、全20項目からなる(Table 2)。回答は「1全く当てはまらない」から「5よく当てはまる」の5件法により評定を求めた。

**フェース項目<sup>2)</sup>** 滞在期間と日本語能力などについて尋ねた。滞在期間については、すべての滞在期間を合計して、「半年未満」「1年未満」「1年以上2年未満」「2年以上3年未満」「3年以上」から回答を求めた。また、日本語能力に

関しては、「日常会話にもまだ困難を感じる」「日常会話なら問題なし」「ほぼ十分についていけるが、専門の議論は難しい」「学問の専門領域の会話も問題ない」の4段階を用意し回答を求めた。

## 結果

### 各動機づけ尺度の因子分析

自律的留学動機づけ尺度28項目に対して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，因子負荷量の絶対値.40以上を基準に，4因子21項目を採用した（Table 1）。因子の解釈にあたっては，永作・新井（2003）の因子解釈を参考にし，さらに自己決定理論に基づいて動機づけを測定している他の研究の結果も参考にした。その結果，第1因子は，「自分の視野を広め，人生経験を豊かにしたいから」「自分の将来の成功と結びつくから」「自分の将来の夢をかなえるため」といった項目が高い負荷を示していた。これらの項目は，留学の重要性により動機づけられているという内容であることから，「同一化的動機づけ」因子と命名した。第2因子には，「外国語を学ばないと不安だから」「日本語を学びたいから」「日本語の1級をとるために必要だから」といった項目の負荷が高く，留学そのものが十分内在化されていないまま留学をしていることから，「取り入的動機づけ」因子と命名した。第3因子には，「留学というものは楽しいから」「外国で生活することが面白そうだから」「外国での勉強は楽しいから」といった項目の負荷が高く，留学そのものが楽しいという内容であることから，「内発的動機づけ」因子と命名した。第4因子には，「留学ブームで，みんなが行くから」「友人（恋人）が留学したから，私も留学したい」「自分が行きたいかどうかではなく，周りの人に影響されたから」といった項目の負荷が高く，外的な圧力によって留学していることから，「外的動機づけ」因子と命名した。ただし，因子分析の結果によると，同一化的動機づけに分類された項目の中には統合的動機づけとも考えられるものが存在したが，自己決定の中では比較的自己決定性の高い動機である同一化動機づけと自律的な統合的動機づけは多くの部分を共有してい

ると考えられるため，本研究では，同一化的動機づけとして，まとめて扱うことにした。各因子におけるCronbachの $\alpha$ 係数は，第1因子のものから順に， $\alpha = .87$ ， $\alpha = .75$ ， $\alpha = .82$ ， $\alpha = .60$ であった。第4因子の値はやや低い，一応の信頼性が保証された。

次に，留学生学習動機づけ尺度20項目に対して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，因子負荷量の絶対値.40以上を基準に，4因子20項目を採用した（Table 2）。その結果，安藤（2005）と内容的にほぼ同様の，「内発的動機づけ」「同一化的動機づけ」「取り入的動機づけ」「外的動機づけ」の4因子構造が示された。そこで，安藤（2005）にあわせて，因子を命名した。具体的には次の通りである。第1因子は「知識を増やしたいと思うから」「勉強内容が将来に役に立つと思うから」「自分のためになると思うから」といった項目が高い負荷を示していた。これらの項目は，学習の重要性により動機づけられているという内容であることから，「同一化的動機づけ」因子と命名した。第2因子には，「良い成績を取りたいから」「良い大学に入りたいから」「学生なので，勉強するのが当たり前だから」といった項目が高い負荷を示しており，学習の価値が十分内在化されていないまま学習に取り組んでいると考えられる。そのため，第2因子を「取り入的動機づけ」因子と命名した。第3因子は，「勉強することが楽しいから」「授業の内容が楽しいから」「新しい知識を得るのが楽しいから」といった項目の負荷が高く，学習そのものが楽しいという内容であることから，「内発的動機づけ」因子と命名した。第4因子は，「周りの人たちが勉強をしているから」「成績が悪いと，恥ずかしいから」「勉強をしないと教師に言われるから」といった項目の負荷が高く，外的な圧力によって学習していることから，「外的動機づけ」因子と命名した。各因子におけるCronbachの $\alpha$ 係数は，第1因子のものから順に， $\alpha = .88$ ， $\alpha = .81$ ， $\alpha = .83$ ， $\alpha = .77$ であった。以上から，一定の信頼性が確認されたといえる。

### 各変数の統計量

主観的幸福感尺度，学習・生活への適応尺度については，先行研究に基づいて下位尺度得点

Table 1 自律的留学動機づけ尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転；N=307）

項目	I	II	III	IV	M(SD)
<b>I 同一化的動機づけ</b>					
20 自分の視野を広め、人生経験を豊かにしたいから	<b>.87</b>	-.36	.00	-.06	4.11 (1.08)
21 自分の将来の成功と結ぶつくから	<b>.83</b>	.00	-.13	-.03	3.92 (1.14)
27 自分の将来の夢をかなえるため	<b>.78</b>	-.09	.02	.13	3.77 (1.24)
25 知識を増やしたいと思うから	<b>.76</b>	-.02	.01	-.10	3.78 (1.18)
17 外国の文化、知識を学びたいから	<b>.63</b>	.18	.00	-.09	3.56 (1.26)
26 留学したほうが得だと思ふから	<b>.61</b>	-.03	.16	.22	3.57 (1.22)
18 専門的な知識を勉強をしたいから	<b>.60</b>	.15	-.07	-.05	3.55 (1.24)
19 海外の学位をとりたいたから	<b>.56</b>	.09	.02	.13	3.45 (1.32)
<b>II 取り入的動機づけ</b>					
7 外国語を学ばないと不安だから	-.13	<b>.71</b>	-.04	.23	2.46 (1.33)
16 日本語を学びたいから	.18	<b>.61</b>	.01	-.26	3.44 (1.28)
28 日本語の1級を取るために必要だから	-.02	<b>.60</b>	-.05	.11	2.87 (1.47)
3 外国語を喋らないと恥ずかしいから	-.22	<b>.57</b>	.06	.11	2.45 (1.29)
22 自分の外国語力を上げたいから	.29	<b>.52</b>	-.05	-.20	3.68 (1.26)
2 外国語を覚えなければならぬものだから	.08	<b>.51</b>	-.05	.00	3.27 (1.29)
<b>III 内発的動機づけ</b>					
12 留学というものは楽しいから	-.14	.02	<b>.94</b>	-.13	3.16 (1.28)
13 外国での生活することが面白そうだから	.18	-.09	<b>.68</b>	.10	3.21 (1.25)
11 外国での勉強は楽しいから	.04	.05	<b>.68</b>	-.12	2.99 (1.28)
<b>IV 外的動機づけ</b>					
6 留学ブームで、みんなが行くから	.00	.26	-.03	<b>.63</b>	2.33 (1.27)
5 友人（恋人）が留学したから、私も留学したい	-.11	.08	.10	<b>.47</b>	2.25 (1.38)
8 自分が行きたいかどうかではなく、周りの人に影響されたから	.03	.07	-.09	<b>.46</b>	2.47 (1.31)
4 両親、家族に留学をせよと進められたから	.14	-.03	-.10	<b>.45</b>	2.71 (1.39)
<b>V 剰余項目（7項目）</b>					
15 就職に役に立つと思ったから	.36	.23	.10	.01	3.47 (1.32)
14 留学したかったから	.36	.06	.27	.12	3.39 (1.38)
23 外国の大学（大学院）進学のための勉強をしたと思ったから	.26	.39	.04	-.03	3.35 (1.36)
10 母国では知識や外国語力が足りなかったから	.27	.35	.03	-.11	3.26 (1.36)
9 留学しないと就職するとき不利だから	.19	.34	.03	.32	2.63 (1.32)
1 若者は留学に行くものだから	.15	.27	.04	.15	2.94 (1.30)
24 将来、日本に残って仕事したい	.18	.25	.12	-.04	3.08 (1.25)
因子間相関					
	I	II	III		
	II	.55			
	III	.49	.52		
	IV	-.39	-.02	-.14	

Table 2 留学生学習動機づけ尺度の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転;  $N=307$ )

項目	I	II	III	IV	$M(SD)$
<b>I 同一化的動機づけ</b>					
15 知識を増やしたいと思うから	<b>.93</b>	-.13	-.06	-.01	3.83 (1.18)
10 勉強内容が将来に役に立つと思うから	<b>.82</b>	-.06	-.08	-.04	3.77 (1.19)
13 自分のためになると思うから	<b>.74</b>	.10	-.16	-.11	4.03 (1.06)
11 希望する職業に必要なだから	<b>.65</b>	.01	.09	.00	3.64 (1.24)
12 勉強すべき大切な内容だから	<b>.64</b>	.10	.08	.02	3.68 (1.16)
16 今、勉強しておかないと後で困るから	<b>.57</b>	-.01	.17	.05	3.74 (1.20)
14 日本の生活に慣れるために必要があるから	<b>.53</b>	.18	-.03	.05	3.46 (1.26)
<b>II 取り入れ的動機づけ</b>					
5 よい成績をとりたいたから	-.08	<b>.92</b>	-.06	-.09	3.60 (1.27)
6 よい大学に入りたいから	-.03	<b>.80</b>	.03	-.02	3.50 (1.27)
7 学生なので、勉強するのがあたり前だから	.14	<b>.50</b>	.16	.05	3.43 (1.28)
9 奨学金をもらいたいたから	.13	<b>.47</b>	.05	.01	3.20 (1.35)
8 勉強しないと、不安だから	.09	<b>.42</b>	.09	.06	3.18 (1.32)
<b>III 内発的動機づけ</b>					
18 勉強することが楽しいから	-.14	.11	<b>.90</b>	-.05	3.22 (1.23)
17 授業の内容が楽しいから	-.02	-.08	<b>.87</b>	.03	3.12 (1.22)
19 新しい知識を得るのが楽しいから	.41	.01	<b>.45</b>	-.02	3.67 (1.16)
20 難しいことを挑戦するのが好きだから	.23	.05	<b>.42</b>	.02	3.50 (1.20)
<b>IV 外的動機づけ</b>					
2 外国語を覚えなければならないものだから	.05	-.13	.00	<b>.96</b>	2.99 (1.30)
1 勉強をしないと教師に言われるから	-.12	-.09	.15	<b>.67</b>	2.70 (1.25)
3 周りの人たちが勉強しているから	-.04	.15	-.13	<b>.62</b>	3.45 (1.23)
4 成績が悪いと、恥ずかしいから	.06	.40	-.13	<b>.46</b>	2.84 (1.38)
因子間相関					
	I	II	III		
	II	.60			
	III	.58	.46		
	IV	.04	.38	.18	

を算出した。Table 3 に各変数の平均値 ( $M$ ) と標準偏差 ( $SD$ ) を示す。Cronbachの  $\alpha$  係数を求めたところ、各変数において概ね.60以上の値が得られた。

#### 動機づけ下位尺度間の相関係数 (概念構成妥当性)

自律的留学動機づけおよび留学生学習動機づけについて、下位尺度間の相関係数を算出した (Table 4)。その結果、いずれにおいても概念的に隣り合う動機づけ間では正の相関があり、概念的に隔たった動機づけ間では無相関、ある

いは負の相関が見られた。下位尺度間の相関を見ると、自律的留学動機づけに関しては、外的と内発はほぼ無相関であるが、留学生学習動機づけについては有意な正の相関が見られた。また、留学生学習動機づけについては外的と同一化はほぼ無相関であるが、自律的留学動機づけについては有意な負の相関が見られた。

次に、自律的留学動機づけと留学生学習動機づけはともに、同一化と内発では比較的高い相関が見られているが、外的と取り入れの相関は小さい値であった。

Table 3 各変数の基本統計量 (N=307)

	M (SD)	$\alpha$ 係数
自律的留学動機づけ		
内発	9.37 (3.26)	.82
同一化	60.09 (7.86)	.87
取り入れ	26.31 (2.97)	.75
外的	7.04 (2.97)	.60
留学生学習動機づけ		
内発	13.52 (3.90)	.83
同一化	33.51 (6.33)	.88
取り入れ	16.95 (4.88)	.81
外的	9.66 (3.92)	.77
学習・生活への適応		
学習の精神状態	20.90 (5.63)	.78
学習の指導	8.10 (3.07)	.74
経済的側面	9.77 (3.02)	.70
学生生活	13.20 (4.06)	.77
身体面の健康	7.21 (2.32)	.60
主観的幸福感	33.69 (4.65)	.74

Table 4 自律的留学動機づけと留学生学習動機づけの下位尺度間相関係数 (N=307)

	自律的留学動機づけ				留学生学習動機づけ		
	内発	同一化	取り入れ	外的	内発	同一化	取り入れ
自律的留学動機づけ							
内発							
同一化	.44 **						
取り入れ	.30 **	.46 **					
外的	-.03	.12 *	.10				
留学生学習動機づけ							
内発	.45 **	.50 **	.30 **	-.01			
同一化	.25 **	.42 **	.24 **	-.19 **	.60 **		
取り入れ	.31 **	.45 **	.28 **	.06	.51 **	.59 **	
外的	.08	.17 **	.18 **	.36 **	.14 *	.06	.36 **

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

### 各尺度の相関係数

動機づけと適応の関連を検討するために、それぞれの下位尺度間の相関係数を算出した (Table 5)。その結果、留学内発的動機づけ、留学同一化的動機づけ、学習内発的動機づけ、学習同一化的動機づけにおいて、主観的幸福感と弱い正の相関が示された。また、留学外的動機づけ、学習外的動機づけにおいて、主観的幸福感と弱い負の相関が示された。さらに、留学内発的動機づけは身体面の健康および学習の精神状態と、学習内発的動機づけは学習の精神状態と、学習同一化動機づけは学習の指導と、それぞれ有意な正の相関が認められた。また、留学取り入れ的動機づけ、留学外的動機づけ、学習外的動機づけにおいて、ほぼすべての学習・生活への適応領域に負の相関が認められた。従って、概ね予測通りの結果が得られた。

### 動機づけが適応に及ぼす影響

動機づけ (留学動機と学習動機)、滞在期間および日本語能力を独立変数、主観的幸福感および学習・生活への適応を従属変数とする重回帰分析を行った。得られた標準偏回帰係数の値を (Table 6) に示す。

留学動機づけと学習動機づけにおいては、一般的な項目内容から判断し、また、留学内発的動機づけと学習内発的動機づけの相関値、留学同一化的動機づけと学習同一化的動機づけの相関値が高いこと、これらを単独に重回帰分析の

独立変数として分析を行う際に多重共線性の問題が発生することから、それぞれの内発的動機づけ、同一化的動機づけを足し合わせて、「留学・学習内発」、「留学・学習同一化」とし、分析した。また、岩男・荻原 (1988) は基礎的属性としての日本滞在期間、日本語能力が異文化適応に影響を与えたとの結果を出した。このことから、本研究では、2つの属性を考慮し、分析を行った。ただし、これらはいずれも順序尺度であったため、分布を考慮して値になおして、重回帰に投入した。滞在期間については、「半年未満」「1年未満」「1年以上2年未満」「2年以上3年未満」を1 ( $N=135$ )、「3年以上」を2 ( $N=170$ ) とした。さらに、日本語能力については、「日常会話にもまだ困難を感じる」と「日常会話なら問題なし」を1 ( $N=167$ )、「ほぼ十分についていけるが、専門の議論は難しい」と「学問の専門領域の会話も問題ない」を2 ( $N=126$ ) とした。

主観的幸福感については、留学・学習内発的動機づけとの間に正の関連が見られ、また学習外的動機づけとの間に負の関連が見られた。一方、学習・生活への適応については、留学・学習内発的動機づけは学習の精神状態との間に正の関連が見られた。さらに、留学取り入れ的動機づけ、留学外的動機づけとほぼすべての適応領域との間に負の関連が見られ、また学習外的動機づけは学習の精神状態、学生生活との間に

Table 5 動機づけと適応との相関係数 ( $N=307$ )

	主観的幸福感	学習・生活への適応				
		学習の精神状態	学習の指導	経済的側面	学生生活	身体面の健康
<b>自律的留学動機づけ</b>						
内発	.28 **	.17 **	.06	.02	.02	.14 *
同一化	.22 **	.04	.09	-.06	.02	.01
取り入れ	.01	-.14 *	-.17 **	-.12 *	-.12 *	-.12 *
外的	-.18 **	-.23 **	-.22 **	-.23 **	-.29 **	-.18 **
<b>留学生学習動機づけ</b>						
内発	.23 **	.14 *	.00	-.06	.00	.00
同一化	.18 **	.11	.16 **	.02	.09	.08
取り入れ	.08	.01	.02	-.08	-.11	.01
外的	-.17 **	-.16 **	-.17 **	-.09	-.25 **	-.10

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ .

負の関連が見られた。従って、動機づけが、ある程度主観的幸福感、学習・生活への適応に影響していることが示唆された。

また、この他の要因では、滞在期間と主観的幸福感、学習の精神状態および学生生活との間に弱い正の影響が見られ、さらに日本語能力と学生生活との間にも正の影響が見られた。

### 考察

本研究の目的は、自己決定理論に基づいて、在日中国人留学生の動機づけと主観的幸福感および学習・生活への適応の関係について検討することであった。

因子分析の結果、自律的留学動機づけおよび留学生学習動機づけの両尺度とも、「外的動機づけ」「取り入れの動機づけ」「同一化的動機づけ」「内発的動機づけ」の4因子構造が示された。これは、自己決定理論に沿った結果といえることから、これらの尺度についてある程度の因子的妥当性が示されたといえるだろう。また、自律的留学動機づけおよび留学生学習動機づけについて、下位尺度間の相関係数を算出した結果、いずれにおいても概念的に隣り合う動機づけ間では正の相関があり、概念的に隔たった動機づけ間では無相関、あるいは負の相関が見られた。この結果については、領域間で若干の相違が見られたものの、先行研究の結果と一致するものであった (Hayamizu, 1997)。

動機づけと適応との相関関係を検討した結果、動機づけと適応との間に、ある程度の関連性が示されたといえる。さらに、本研究では、日本語能力と滞在期間を考慮して、これらと動機づけを独立変数に投入して重回帰分析を行った結果、中国人留学生の適応においては、動機づけが主観的幸福感および学習・生活への適応につながると判断できる結果が示された。

以上の結果から、主観的幸福感に関しては、当初の予測通りであり、内発的動機づけを高く持って留学すると、主観的幸福感が高くなるということが明らかになった。このことから、自己決定理論から導かれるように、自己決定性の高い動機づけを持つほど適応的であり、自己決定性の低い動機づけを持つ場合は適応状態が悪いといえる。つまり、このような自己決定的な留学動機づけを有して留学することが、在日中国人留学生の適応の高さにつながることを示された。自己決定理論によれば、内発的動機に基づいて行動が遂行された場合には、その後の適応が促進されるという (Kasser & Ryan, 1999; Ryan, Rigby & King, 1993)。本研究の結果もこのような自己決定理論による予測を支持する結果といえよう。

また、学習・生活への適応に関しては、自己決定性の低い動機づけである外的動機づけまた取り入れの動機づけは、予測通り、適応と負の関連を示した。これは、留学する際、親、社会

Table 6 適応における重回帰分析の結果

	主観的幸福感		学習・生活への適応			
		学習の精神状態	学習の指導	経済的側面	学生生活	身体面の健康
留学・学習内発	.33 **	.33 **	.04	.07	.12	.10
留学・学習同一化	-.03	-.14	.10	-.04	-.03	.00
留学取り入れ	-.04	-.17 **	-.19 **	-.10	-.12 †	-.11
学習取り入れ	.03	.02	.01	-.07	-.07	-.01
留学外的	-.10	-.16 *	-.12 †	-.19 **	-.17 **	-.14 *
学習外的	-.18 *	-.13 †	-.08	.03	-.16 *	-.02
滞在期間	.14 *	.13 *	-.03	.09	.11 †	.03
日本語能力	.10	.07	.10 †	.10	.16 **	.03
$R^2$	.19 **	.17 **	.10 **	.08 *	.17 **	.05

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

に強制されているなど外的要因によって留学を決めた場合、その後の適応が阻害されることを示唆する結果といえる。一方、自己決定性の高い動機づけである内発的動機づけに関しては、学習の精神状態領域のみ適応と正の関連が認められたが、それ以外の領域では、内発的動機づけは予測と異なり適応との関連がほとんど認められなかった。これは、意欲が高く学習環境に満足している場合もあるが、意欲の高さによって教員の指導や評価が適切でないと感じる場合もあると考えられる。そのため、結果的に、学習・生活への適応においては、内発的動機づけとは正の関連がほとんど認められなかったのかもしれない。ただし、今回の調査結果だけをもとに論じるのは時期尚早であり、同様の結果が再現されるかは今後の検討が必要であろう。

本研究の結果は、次の二つの点から意義の大きいものといえる。まず第1に理論的意義である。先行研究において、異文化適応に重要とされてきた日本語能力や滞在期間の要因を統制して、重回帰分析を行った。その結果により、重決定係数の値が全体に低めであったことも考慮すると、慎重に検討していく必要があるものの、動機づけと適応との関連がある程度示された。このことから、動機づけの自己決定性が異文化適応にとって重要な要因であることが示唆された。第2の意義は、留学生の異文化適応に関して重要な示唆を与えるという点である。具体的にいえば、自己決定性の低い動機づけである取り入れ的動機づけと外的動機づけを高く持って留学を行うと、日本において適応状態が悪いということが示された。日本での適応といった観点から見ると、中国人留学生が日本で適応をしていく際に、親や社会に強制された理由で留学を志すことは、あまり望ましくないと考えられる。一方、自己決定性の高い動機づけである内発的動機づけを高く持って留学を行うと、日本において適応状態が良いということが示唆された。従って、留学生が内発的動機づけを強く持てるように指導・援助することは、日本に留学してからの適応を促進し、不適応を予防することが可能になると考えられる。

在日留学生に安心して勉学に励んでもらうために、日本政府、公的機関が様々な公的援助を

行ってきた。各大学を中心に留学生の援助や相談を担当する教官が配置され、留学生の援助の実践についての報告や援助のあり方について議論も展開されるようになってきたが、これらは外部の力による適応援助であると考えられる。今後、留学生の内発的動機づけから着目し、留学生の自己決定性を育成するために、本研究は動機づけという視点で大きな示唆が得られたといえよう。

先の考察で述べたもののほかに、以下の課題が考えられる。

まず、本研究で得られた結果は先行研究を根拠にした質問紙調査であり、適応に影響する要因として、留学動機づけと学習動機づけ以外の要因があることも考えられる。従って、今後本研究の結果を土台にして、より多様な要因との関連性について検討していくことが必要であると考えられる。

次に、本研究では、日本語能力、滞在期間の要因を考慮して検討したが、他の要因（例えば、日本社会特有の対人的スキルの獲得度、対人関係の広がりやソーシャル・サポートの量など）については、今後検討する必要があるであろう。

最後に、留学生の動機づけについて今後の研究の方向性を示唆しておきたい。留学生に対してどのような指導や援助を行うと内発的動機づけを高く持つことができるのかといった点や、自己決定的でない動機づけを持って留学してきた学生が自己決定的な学習動機づけを持つことができるように援助するためにはどういった教育的動きかけが必要であるかといった点は、最も重要な今後の課題であるといえる。

今後はより具体的な援助を行うために、実践場面での留学生の生活に対する実態を把握するとともに、留学生一人一人への援助や留学生との相談を行う必要があると思われる。留学生への個別援助を必要としていることが重要であると理解し、特に、異文化適応と動機づけの関連をより詳細に検討することが課題となる。

## 【脚注】

- 1) 欠損値のあるデータについては分析ごとに除外した。そのため、分析によってはこれより少ない人数が対象となっている場合もある。
- 2) この他に、奨学金の有無、アルバイトの有無、居住形態などについても尋ねたが、本研究では分析に用いなかったため、説明を省略する。

## 【引用文献】

- 安藤史高 (2005). 大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連 一宮女子短期大学紀要, 44, 91-99.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Hayamizu, T. (1997). Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Japanese Psychological Research*, 39, 98-108.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 岩男寿美子・萩原 滋 (1988). 日本で学ぶ留学生 勁草書房
- 吉 沅洪 (1999). 中国人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響 学生相談研究, 20, 9-18.
- 周 玉慧 (1995). 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として—心理学研究, 66, 33-40.
- 葛 文綺 (1999). 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に—名古屋大学教育学部紀要, 46, 287-297.
- 葛 文綺 (2003). 中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について 学生相談研究, 23, 274-283.
- Kisser, V. & Ryan, R.M. (1999). The relation of psychological needs for autonomy and relatedness to vitality, well-being, and mortality in nursing home. *Journal of Applied Social Psychology*, 29, 935-954.
- 松原達哉 (1991). 国際交流と留学生のカルチャーショックおよびストレスの問題 青少年問題研究, 40, 51-70.
- 永作 稔・新井邦二郎 (2003). 自律的高校進学動機尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 26, 175-182.
- 永作 稔・新井邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528.
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000). self-determination theory and the facilitation of Intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R.M., Rigby, S. & King, K. (1993). Two types of religious internalization and their relation to religious orientations and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 586-596.
- 佐藤真理子 (1996). 留学生の異文化適応—基礎的諸属性との関連—比較・国際教育, 4, 31-41.
- 高井次郎 (1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要, 36, 139-147.
- 田中共子 (2003). 日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較 学生相談研究, 24, 41-51.
- 田中共子・藤原武弘 (1992). 在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討 社会心理学研究, 7, 92-101.
- 湯 玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の視点から—国際文化研究紀要, 10, 293-328.
- 上原麻子 (1988). 学生の異文化適応—言語習得及び異文化適応—理論的・実践的研究 広島大学教育学部, 111-124.
- 徐 光興・蔭山英順 (1994). 在日中国人留学生の適応に関する実体と問題 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 41, 39-47.
- 姚 霞玲・松原達哉 (1990). 留学生のストレスに関する研究 (1) —生活ストレスを中心に— 学生相談研究, 11, 1-11.

## 謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導とご助言を下さった目白大学人間学部小野寺敦子教授に深く感謝いたします。また、調査にご協力をいただきました国士館大学福原一成さん、目白大学中国語学科竹中佐英子先生に心より感謝申し上げます。さらに、貴重な時間を割って調査に協力して下さった留学生たちに心から御礼を申し上げます。

## The effects of autonomous motivation on well-being and adaptation of Chinese students in Japan

Hongyan Tan                      Mejiro University, Graduate School of Psychology  
Tsutomu Watanabe              Mejiro University, Faculty of Human Sciences  
Hiroyuki Konno                 Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2010 vol.6

### **[Abstract]**

The purpose of the present study was to examine effects of motivation on cultural adjustments (well-being, adaptation to the learning and action) of Chinese students in Japan, in the framework of self-determination theory. Chinese students ( $N=307$ ) answered a questionnaire. The results showed that high autonomous motivation of Chinese students in Japan related to high level of well-being and adaptation to the learning and action. On the other hand, low autonomous motivation of Chinese students in Japan was negatively correlated with well-being and adaptation to the learning and action. The implications for helping these students were discussed.

**keywords** : self-determination theory, motivation, well-being, adaptation, Chinese students